

「平和の俳句 6」

2015年06月02日

「東京新聞」で連載している「平和の俳句」は面白く、考えさせられる。5月の俳句から感想を書きたい。子どもの句は真っ直ぐなだけに、心を打つ。「へいわとはちきゅうもひともしなぬこと 萩原拓実 6歳」<金子兜太 拓実君は小学校一年生、六歳。平和は地球も人も死なないことなんだと言い切り、しかも地球と人を同時に言うところが鋭い。>異常気象があちこちで起こっている。利便性を求めエネルギーを消費し、温暖化をもたらした。地球も音をあげているようだ。人を殺し合う戦争は収まらない。日本政府はそれに便乗しようとしている。人間の愚かさと罪深さは計り知れない。「日本に平和のきまりこれ一番 鈴木麻里衣(まりい) 9歳」<いとうせいこう 決まりで平和になっているというこの先見性、尊さは「一番」である。><金子兜太 日本では平和は絶対の決まり。九歳の鈴木さんでも確信。> 憲法九条の決まりが平和を作り出している。一番尊い。これを変えようなどということがあってはならない。「未来はねいろいろあるよけわしいね 児玉羽琉(はる) 10歳」<いとうせいこう 楽しいとは言わない小学生。しかし「けわしい」からこそ切り開くのだと教えられるような気がする。いろいろあるけど明日へと。> 児玉さんは憲法が危ない状況にあることを知っている。だから「けわしいね」と言ったのであろう。平和はおのずと来るものではない。人々の努力と忍耐で作りに出していくのである。ペトロ書3章11節bには「平和を願って、これを追い求めよ」と書いている。

平和に関して声を上げることは、今最も大切ではないか。「平和とは声を出すことぞ揚雲雀(あげひばり) 柴田隆一 89歳」<金子兜太 まったくその通りです。大事なことは大声を出せ。空の雲雀のように高らかに。「平和」を忘れてる人は案外多いのだから。> 駅頭でチラシを配っている時、受け取らないが会釈する人がいる。顔を横に振って拒絶する人がいる。全く無関心な人がいる。私は無視されることがイヤである。「三猿(さんえん)の呪縛の解けて七十年 片桐伝一郎 76歳」<いとうせいこう 表現のすべて、感覚のすべてを抑え込まれていた時代を反復すまじ。><金子兜太 「見ざる・聞かざる・言わざる」から解放されて七十年。しかし。> 敗戦後、言論の自由を獲得して大喜びをした。しかし、現在のジャーナリズムは自主規制に走っているのではないか。言葉を失う時、人間の魂は死ぬ。「沖縄の痛みを叫べ珊瑚礁 鈴木康子 55歳」<金子兜太 米軍が日本に持つ専用施設の七割余りが沖縄に集中し、今も普天間に代えて珊瑚礁の美しい辺野古にしようとしている。反対です。> 翁長雄志沖縄県知事が県民大会語った「うちなーんちゅ、うしえーて一、ないびらんどー(沖縄人をないがしろにしてはいけませんよ)」という言葉が印象的である。

次の二つの句が心に響いた。「無言館に霊(たま)留め置くや蝉しぐれ 鷹羽(たかば) 正明 65歳」<金子兜太 長野県上田市にある戦没学生の絵は、無言館の抗議を今も伝えている。蝉しぐれに囲まれた抗議の声は戦争を憎み、恋人を想う。> 無言館には三度行った。館内は独特な静寂さを保っているが、夭折した画学生の叫びは限りなく大きい。「『武器はイヤ』母は雛から刀狩り 吉永愛子 59歳」<金子兜太 着想がおもしろい、男雛から刀や弓や《戦う構えのもの》はどしどし取り上げている母の率直潔癖な姿が、まことに微笑ましい。> 雛壇は身分、男女の差別構造でイヤという人がいる。刀狩りは豊臣秀吉が安寧のために実行した軍縮政策であるが、雛からも武器を取り去る軍縮の徹底さは学びたいものである。